

～タフマネってこんな人～

① 公益財団法人大阪府国際交流財団総括企画員 吉川友香さん

財団が公益財団法人に移行した H24 年度に「これからは多文化共生事業を推進していただける人材が必要」と上司の勧めもあり、受講することになりました。

その頃は、外国人住民の方から見ると遠い存在である地域国際化協会という立場でありながら、地域に根差す多文化共生事業をいかに大阪府域で展開させていけるのか？という難しさを感じていた時でした。

受講してよかったことは大きく 2 点あります。

1 つは、同じ目標に向かって取り組む全国の仲間と知り合えたことです。特に共通点の多い地域国際化協会の方との出会いは大きかったです。課題の共有はもちろんですが、良いと思われる取り組みについては積極的に学び、自地域でも展開しています。

2 点目は、色々な地域の状況を知ることで、大阪府の地域柄を改めて感じる事ができたことです。市町村数が 43 と比較的多いですが、概ね 35%の地域には専従職員がいる国際交流協会や外国人専用の行政窓口が存在しています。

十分とは言えませんが、他地域から見ると群を抜いて多いと知り、「なぜ全てに無いのか」と嘆くより、頼れる存在の市町村協会等と強固で柔軟なネットワークを構築しながら、府域全体に還元できる事業を展開していくことで、多文化共生が根付いたまち「おおさか」を目指しています。

(公財) 大阪府国際交財団 市町村国際交流協会等との連携

<https://www.ofix.or.jp/networking/>

② 一般社団法人多文化リソースセンターやまなし 加藤順彦さん

タブマネ9期生、山梨県甲府市で毎日外国籍の乳幼児に囲まれて活動しています。海外駐在員としてブラジルで30年暮らした後、2006年に日系人が多く住む山梨県に生活拠点を構えました。

当初から最初は山梨県内での活動を目指し、次の段階では全国的な事業を手掛けてみたいと考えていました。ブラジル人やペルー人から、労働・医療・教育・生活分野でのボランティア通訳の依頼を受けて対応している中で、多民族・多文化社会のブラジルでは耳慣れない「多文化共生」という言葉に遭遇し自己研鑽のために、田村太郎氏の下で外国人との共生社会の取り組みについて学びました。

活動当初に作ったボランティア団体を経て、その後に一般社団法人多文化リソースセンターやまなしを設立しました。 (<https://www.tabunkayamanashi.com>)
活動の基本理念は「調和と解決、情熱をもって」であり、多様化している外国人を取り巻く社会環境に迅速かつ的確に対応するための日本語・生活支援を行う専門性の高い人材ネットワークの形成を行ってきました。

現在、2つの市町村から認可を受けて小規模保育園を運営しており、両園で15名の外国籍乳幼児（0～2歳児）を預かっています。3歳以降は公立保育園に送り出して、その後の小学校における勉学がスムーズに行けるように心がけています。

今後は、「多文化共生」の先にあるものを目指して、グローバル化の第2ステージにおいても Strategy を念頭に次世代のために輝き続けたいと思います。

③ 一般財団法人日本国際協力センター多文化共生課 山本祐子さん

大阪府内の国際交流協会に在職中の 2010 年 6 月に、全国市町村国際文化研修所 (JIAM) の「多文化共生マネージャー養成コース」で「タブマネ」に認定され、今年で 10 年になります。協会ではタブマネで得た知識やつながりを活かし、日々の気づきや課題解決のための事業を企画し、在住外国人やボランティアの協力を得て進めていこうと考えていた矢先に東日本大震災が起きました。大きな被害を受けた宮城県石巻市にもタブマネの同期がいました。5 日ほど連絡が取れなくなりましたが、他のタブマネ同期と共に「無事を確認でき安堵した」と同時に、遠く離れた大阪から何か力になれないかと考えました。発災後まもなく、JIAM で外国人被災者向けの多言語相談と多言語による情報発信に取り組むこととなり、多言語情報発信のスタッフとして「確かな情報」を言語ごとに「正しく伝える」ミッションのもと、全国から参集したタブマネと取り組みました。この経験により災害大国と言われる日本における多文化視線での防災や災害時における避難所対応、情報提供の体制構築の必要性を痛感し、隣接府県 3 市の協会職員であるタブマネと協働し、多言語防災パンフレットを作成しました。

協会退職後も気づけば 多文化共生の仕事を選んでいました。外国ルーツの子どもの学習支援と企業の CSR 活動をつなげる事業を経て、現在は (一財) 日本国際協力センター (JICE) で定住外国人の安定就労のための「しごとのための日本語」(厚生労働省委託事業【参考】URL 参照) のコーディネート業務に従事しています。いずれも協会在職中には携わることができなかった事業であり、これからの日本社会において必要な事業であるのだと思っています。

タブマネの皆さんは、いつも情報を交換し、地域や組織に関わらず相談できる頼れる存在です。昨年も千葉県船橋市での多言語支援センター設置・運営訓練に参加できたことなど、公私にわたり私の「多文化共生」の基になっている、それが私にとってのタブマネです。

末筆ながら、この度の九州での豪雨により被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

【参考】厚労省委託事業：定住外国人就労・定着支援研修事業（定住外国人就職支援コース）

URL <https://www.jice.org/tabunka/>

④ 甲賀市国際交流協会事務局長 大河原佳子さん

1997年、地元CATV局で国際交流協会設立総会の取材をし、その場で入会。それを機に活動を始め、この「業界」にどっぷり浸かりました。中華料理店をしていた父が世話好きだったこともあり、何人もの留学生を受入れました。その父がフィリピンで亡くなり、現地の方にお世話になったことを違う形でお返ししたいと、外国につながる人たちも住みやすい「まち」になるよう取り組んでいます。

そうした経験や感覚、人脈を頼りに活動していましたが、多文化共生のスペシャリストとして地域や協会の取り組みをコーディネートできればと、2015年にタブマネ研修を受講しました。タブマネ同期、講師の皆さんとの出会いは私の「たから」となっています。また、期を越え、全国で同じように地域の多文化共生を進める仲間とのつながりもでき、各地の取り組みや事例を知ることができるのはタブマネのネットワークだからこそと思います。

第2次滋賀県多文化共生推進プラン懇話会では、座長を務めさせていただき、県内各地域で外国人県民に一番近いところで活動されている方々にとっても心強いプランになるよう、委員の皆様から意見等を頂きました。コロナ禍において、いち早く県から外国人学校や国際交流協会、日本語教室にマスク等の支援をされたことは、懇話会で交わされた委員の皆様の「おもい」やタブマネの師匠である田村氏、土井氏の助言があったからこそと感慨深いものがあります。

タブマネ＝スペシャリストではなく、タブマネになったからこそ、熱いおもいを持って自己研鑽に励み、「つながり」を生かして様々な取り組みを知ることが大事ですね。

<甲賀市国際交流協会>

<http://kis-koka.org/>

⑤ 公益財団法人徳島県国際交流協会 原田晶さん

多文化共生マネージャー24期生です。アメリカ留学後、少しの間、ITベンチャービジネスに携わり、生まれ故郷である徳島県の国際交流協会でお世話になって20年が過ぎました。現在、阿波おどり交流事業と総務、経理、公益認定関係事務などを担当しています。

以前、一般財団法人自治体国際化協会（CLAIR）の海外研修に参加し、偶然にも留学先の国、州の多文化主義政策、医療通訳や法廷通訳の仕組みについて勉強させていただきました。学生時代を思い出し、コミュニケーションの重要性について、再認識いたしました。

新潟県中越沖地震の際、現地に派遣されました。その時に勉強させていただいたことを、少しでも自身の地域にフィードバックすべく、CLAIRから補助金をいただき、災害多言語支援センター運営業務を補助する簡易業務システムを開発したり、多言語防災ハンドブック作成に参画したりしました。

世界各国の多文化主義政策が難しい局面にある中で、日本型の多文化共生政策がそれをどのように乗り越えていくのかを知る良いチャンスであると考え、多文化共生マネージャー養成コースを受講しました。そこでは、素晴らしい講師陣や参加者のみなさんと出会うことができ、人的ネットワークが広がるとともに、自分自身の無知をあらためて自覚する機会となりました。

これからも、ネットワークを大切にし、知識を広げ、多様な視点から地域に貢献できればと思います。

<公益財団法人徳島県国際交流協会>

<https://www.topia.ne.jp/>

⑥ 公益財団法人佐賀県国際交流協会 SPIRA 理事長 黒岩春地さん

2年前まで、カリブ海に浮かぶ小さな島国、セントルシアで、視覚障害者の支援をしていました。帰国後、タブマネ27期生となりました。

今、鼻風邪をひき、前歯も一本とれてしまいましたが、温かい気持ちでこれを書いています。

10月4日、広々とした郊外の公園で、佐賀県国際交流協会SPIRA主催の国際交流フェアを開催しました。結果、1400人が集まる盛況振りでしたが、ここに至るまで協会内部は中止か実施かを巡って大いに揺れました。

中止派は、「コロナ禍の中で、それでなくても外国人に対する非難の目があるときに、あえて国際交流フェアを実施する必要があるのか、万が一、そこでコロナが出たら、火に油を注ぐことになりはしないか、外国人サポートのSPIRAが逆に彼らを追い込んでしまうことになりはしないか」と主張。

一方、実施派は、「最善の注意をしたうえで、万が一、コロナが出てしまった時は、そのとき。腹をくくって参加した外国人たちを守ろう。問題は隠すことでは決して終わらない。外国人非難が起きれば、その時こそ、SPIRAがその非難に正面からぶつかっていけばいい」と主張。

侃々諤々の議論の末、実施したフェア。嬉しそうに踊る外国人たちの笑顔を見るにつけ、ああやって良かったな、と思いました。プレッシャーが大きかっただけに、打ち上げは皆、泣いて笑っての青春時代のような盛り上がりを見せました。私の前歯も一本欠けました。

この素敵な仲間たちと一緒に、今日も頑張っています。

<公益財団法人 佐賀県国際交流協会 SPIRA>

<https://www.spira.or.jp/>

⑦ 台東区役所戸籍住民サービス課長 段塚克志さん

「段ちゃん@台東区です。」と始まるメールをタブマネ関連ではよく書きます。(笑)
全国的には台東区といっても何処?となるので上野、浅草があるのが台東区です。

私がタブマネになろうと思ったのは前職場(交流促進課)でのこと、台東区の外国人人口の割合が多い(R2.11月1日現在7%)にも係わらず、日本語教室ぐらいしかやっ
ていなく、「在住外国人支援」という言葉で事業を行っていた時のことです。「多文化
共生」という言葉の響きに、なんだか眩しさを覚えながら「このままじゃバクくない?
台東区?!」と、慌てて先進的に取り組んでいる新宿区や世田谷区、大田区に話を聞き
に行ったりしながら無理やり研修の予算を付け、実際に行くとなったら言い出しっぺ?
の私となり、あの地獄(汗)の10日間にいきなりチャレンジする運びとなりました。
右も左もどこか前も後ろもわからないまま、一人さみしくJIAMの個室で泣きなが
らなんとかタブマネとして認定書をもらったのが嘘のようでした。個性的な講師陣、同
期のメンバーに支えながら「台東区にダイバーシティ推進室を作る!」と大風呂敷を広
げ、今日に至っています。

19期である私が当時の戸籍住民サービス課の職員に様々な数字をもらって、研修に
乗り込んだのはだいぶ前になりましたが、思い出とは美しくなるもので最近、課題を
同期最速で仕上げた苦しみよりも夜の楽しみの記憶しか残っていません。

その後は、様々な先輩タブマネとお会いしたり、当区の研修にお越しいただいたり
出来るだけタブマネの肩書が色あせないうちにと色々なところに顔を出していたよう
に思います。研修などで同期との再会や、このような文章を書かせていただける機会を
下さった田村太郎氏にも感謝です。

現在の台東区はと言いますと、念願の「ダイバーシティ推進室」はまだ出来ていま
せんが、多文化共生と名のつくセクションが区民課の一係として出来、日々担当職員が奮
闘しています。また区議会のなかでも「多文化共生」という言葉や外国人施策が議論さ
れるようになり、とある会派の政策要望にも「多文化共生課を創設すること」などと書
かれるようになりました。

「初代ダイバーシティ推進室長」の夢はまだまだかもですが、引き続きタブマネの末
席にしながら台東区のファーストペンギンであることを願っています。

ご一読の皆様、どうか上野、浅草などお越しの際は是非、お立ち寄りください。粗茶
など用意してお待ちしております。

⑧ 一般財団法人自治体国際化協会多文化共生課 ローラ・ピンチャーさん

タブマネ 28 期生（2020 年度）、（一財）自治体国際化協会（クレア）多文化共生課でプログラムコーディネーター（PC）として勤めております。

イギリス出身で、2016 年に大学を卒業後、JET プログラム参加者として、岡山県真庭市で国際交流員として 3 年間勤めました。

2019 年 8 月に転職し、（一財）自治体国際化協会多文化共生課のプログラムコーディネーターとして働き始めました。そこで日本全国の多文化共生の動き等についてたくさん学んで、私も在留外国人としての意見等も共有しながら、みんなと協力して進めていければと思っています。

同じ島国なのに、イギリスと比べると、外国籍の方のコミュニティ等と共生する歴史が日本では短く、それなりの困難があり、また進んでいないところもあると感じています。私はヨーロッパ系イギリス人であり、他の諸国から来られている外国人の方々との扱いも異なる場合がありますので、在住する外国人全員の代表としての立場から話すことはもちろんできませんが、クレアの業務等を通じて、すこしだけでも力になればと思います。

またタブマネ同期のみんなと研修を受けてからも Line などでも情報共有ができ、みんなの熱心さ等を感じて、日本在住の外国人としてすごく感謝です。これからも、全国の自治体・国際交流協会・NPO 等で外国籍を持っている方だけではなく、障害のある方、子ども、外国にルーツを持っている方などへの支援も充実できるように頑張っていきたいと思っています。

<（一財）自治体国際化協会多文化共生課>

<http://www.clair.or.jp/j/multiculture/>

<多文化共生マネージャーの詳細についてはこちらから>

<http://www.clair.or.jp/j/multiculture/jiam/tabumane.html>

⑨ 公益財団法人愛媛県国際交流協会副課長 伊藤優子さん

愛媛県に在住する外国籍住民の半数強が技能実習生です。これまで「やがて去り行く外国人たち」に対する具体的な支援策は無く、その多くが受け入れ企業と地域のボランティアによって支えられてきました。そのため、いつの間にか増えた外国籍住民に対して、どこまで彼らに社会適応を求めるのか、どこまで企業や自治体が取り組んでいくものなのか、ずっと明確な答えを持ってないままでいました。

こうした中で参加したタブマネ研修でしたが、マイノリティ高齢者のデイサービスセンター『ハナの家』の訪問では、日本で生活を送り、日本で生を終える人たちの思いに触れ、共生社会とは私が想像する以上に互いの覚悟や尊重を必要とする長い道のりであることを教えてくれました。

愛媛で出会った外国籍住民の多くが「将来もここにいるかどうかは分からない。」と言います。しかし、少子化と超高齢化社会の到来により、外国人労働者を受け入れる方向に大きく舵を切ったことを踏まえると、「やがて去り行く外国人たち」も、より長く地域や企業に根付く「ともに住みゆく外国人たち」へと急速に変化していくことでしょう。社会の一員として、互いにフェアな関係を模索していく旅はもう始まっています。

私自身は、現在、外国籍住民のコミュニケーション支援の充実を図るため、地域の日本語学習支援の充実に心血を注いでいます。また、愛媛県では外国人被災者の支援を目指す愛媛県災害多言語支援センターが立ち上がる予定です。

民族や国籍を超え、多様な意見に耳を澄ませながら「住みたいまち、住みよいまち」をオール愛媛で作っていけるよう、自らの専門性を高めつつ、全力で取り組んでいきたいと思います。

<公益財団法人 愛媛県国際交流協会>

<http://www.epic.or.jp/index.php>

⑩ 伊万里市まちづくり課多文化共生マネージャー 章潔さん

タブマネ26期、中国無錫市出身の章^{しょう}です。2003年に来日し、日本の某大学で国際交流・留学生支援センターの職員（5年）・国際コミュニケーション学科の講師（5年）を勤め、2018年から今の仕事に就きました。

振り返れば、この10年の間に、「多文化共生」という言葉を知らないまま、元留学生の立場から外国人のサポートをしてきたなあと気づきました。大学教員とはいえ、授業のほかに、「便利屋」同然のことをしなければなりません（中国では考えられないが）。在留資格申請・期間更新の取次、滞納金の取り立て（家賃・水道・電気・ガス・学費等）、交通事故の対応（主に自転車 vs 人・車・電車）、生活上のトラブル対応（騒音、不分別ゴミ、土足入室等）。また、帝王切開の同意書にサインしたり（他に頼れる知人がいないため）、事故で亡くなった留学生の葬式を担当したり、刑務所内の面会の通訳をするなど、ある意味で波乱万丈の「多文化共生」体験をさせてもらいました。

やがて、市役所の仕事が始まり、琵琶湖のほとりで、田村先生と26期の皆様と運命の出会いを果たしました。研修を終えて、もう、目からうろこが落ちたような思いです。その後、田村先生、タブマネ先輩、同期の皆さんの助言を賜りながら、主に以下の活動を行っています。

- 1、自分の役職名「国際交流専門員」を「多文化共生マネージャー」に変更。
- 2、市役所内に「外国人相談窓口」を創設。
- 3、文化庁の「日本語教室空白地域解消推進事業」を申請、採択、「日本語教室 Awesome IMARI」を創設・運営。

「タブマネ」はやりがいのある仕事ですが、非正規雇用で「不安定」・「低収入」の理由で離職せざるを得ない人も少なくありません（行政職員も2、3年で部署が変わる）。「天職」にするためには、国やクレアの力を借りなければなりません、我々も声をあげて、「タブマネ」の価値をアピールしないとイケませんね、と日々考えております。